



和田 智

第二回「ガソリン車を超える、移動と環境のホスピタリティ化」

スピーカー

和田 智（わださとし）

SWdesign TOKYO代表：Audi Design Partner デザイナー

社会的な洞察をふまえながら、暮らしへの本質を追究し、常にピュアなかたちでのデザインを行っている。

1961年東京生まれ。武蔵野美術大学卒。'84年日産自動車入社。同社シニアデザイナー。初代セフィーロ（88）、初代プレセア（89）、セフィーロワゴン（96）などの量販車を担当、'89-'91年、英国ロイヤル・カレッジ・オブ・アート留学。日産時代最後の作品として電気自動車ハイパーミニをデザインした。'98年、アウディAG/アウディ・デザインへ移籍、シニアデザイナー兼クリエイティブマネージャーとして現行A6、Q7などのアウディ主力車種を担当、アウディのシンボルとも言えるシングルフレームグリルをデザインし、その後「世界でもっとも美しいクーペ」と評される『A5』を担当した。その他Audi Pikes Peak Quattro並びにAudi Avantissimoなどのショーカーを担当した。2009年6月アウディから独立 自身のデザインスタジオSWdesign TOKYOを設立した。独立後は新しいビークルデザイン開発に力を注ぐ一方、カーデザインに捕われずドイツでの長きにわたるデザイン活動から“新しい時代のミニマルな暮らし”をデザイン提案して行く。現在Audi Design Partnerでもある。

www.swdesign-office.com



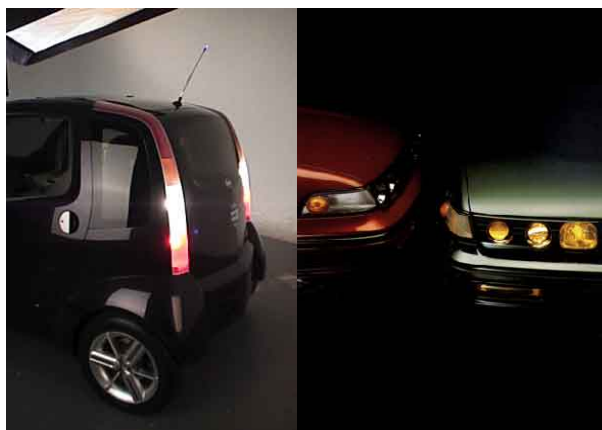
AUDI A6 シングルフレームの初採用モデル



AUDI Q7



AUDI A5



Nissan Hypermini / Cefiro

ご自身の仕事、デザインへの考えをお聞かせ下さい。

日産、アウディとインハウスデザイナーで25年間クルマ業界にいて、日本企業が変化すべきイメージがすでに有ります。今の非常に厳しい時代だからこそ、このターニングポイントをどう活かせるか。そこにやはりアイデアとビジョンを持つことです。今はEVに期待が高まっていますが、新しい商品ではなく、変わってゆく暮らしを提案すべきなのです。暮らしや社会に対してどう溶け込むかというコミュニケーションの設計が、デザインの上で重要だと考えています。

EVについての意見をお聞かせて下さい。そして和田さん自身の、これからへの想いとは？

EVとクルマは、もはや違った役割を持っています。クルマからの継承と新しい暮らしへの調和です。2つの役割は段階的に行うべきで、これは「欧州の持つ自動車文化の継承性」と「日本にしかない謙虚なところ」を活かすべきです。プレミアムを越えて、社としてプレミアムを目指すアウディにおいて、プレミアムが目標になることに違和感がありました。デザイナーは正直に話さないと伝わらない。よりいいものを手に入れることは、大切かもしれませんが、僕にとってそれは本質ではない。アウディの中に、ホスピタリティの考えがあるのならお金では買えない価値を提供していること。無駄を省いたシンプルなボディに、独自の知性や、生活の中に新しいスタイルを提供するなど、これまでのステータス志向市場とは、まったく異なったものです。例え質素でも革新的な何かです。それは私にとってプレミアムではない、プレミアムを超えるものを創っているという事です。生きている価値や生活をよりよく変えるものなら、それは自分の挑戦するものです。

日本の企業へ、ひとこといただけますか？

金融崩壊がもたらしたこのターニングポイントにおいて、インハウスデザイナーがすべきこと。それは『会社を変えよう』です。次期型や新商品をデザインする事も大切かもしれませんが、それ以上に今クリエイターがしなければいけない事は、これまでの会社の体質を変えなければいけないという事です。『会社を変えよう』それは、今最も重要な創造のターゲットとなるべき事なのです。それが出来ないのならば、今の若いデザイナーに将来はない。逆に言えば、若い世代が率先すべきなのです。私はむしろ草食系と呼ばれる世代に期待したい。なぜなら現在企業を牽引している人たちは、いかなる時も戦おうとする姿勢で成長してきました。その概念がヒエラルキーを生み、ビジネスソルジャーをつくり出し、勝つ(=儲ける)為なら何でもするようになったのです。草食系―彼らは、戦おうとはしないのです。ホスピタリティの概念には、彼らが必要なのです。私はそんな彼らと仕事をしてみたいですね。